
「手書き文字通訳入門」

高橋信行

1 手書き文字とは

盲ろう者の手のひら等に、指で直接文字を書く方法
中途盲ろう者だけでなく多くの盲ろう者で使われている。

表 2-2-6a 可能な受信コミュニケーション方法

	人数	割合
音声	1870	69.0%
手話を見る（弱視手話）	218	8.0%
手話を触る（触手話）	182	6.7%
指文字を見る	126	4.6%
指文字を触る	103	3.8%
手書き文字	358	13.2%
筆記	549	20.2%
点字	131	4.8%
指点字	45	1.7%
その他	198	7.3%
特にない	225	8.3%

2 手書き文字によるコミュニケーション方法

2.1 方法

次の三つの方法がある。

1. 盲ろう者の手のひらに、書き手の指で書く (最も早い)
2. 盲ろう者の手のひらに、盲ろう者の指で書く (初心者向け)
3. 机や壁に、盲ろう者の指で書く (初心者向け)

盲ろう者のスキルに応じて選択すること

2.2 書き方

- 爪が手のひらに当たらないよう指の腹で書く
- 手のひらの中央に書く
- 読みやすい文字の大きさを書く
- 読みやすい力加減で書く

2.3 文字の種類

手書き文字を用いる盲ろう者が、読み取り可能な文字の種類としては、次の三つのパターンがある。

1. カタカナ : オヒルニ カレーヲ タベマセンカ
2. ひらがな : おひるに かれーを たべませんか
3. 漢字かな混じり : お昼に カレーを 食べませんか

盲ろう者によって、どの文字種を用いるかは異なる。
事前に確認が必要。

2.4 留意点

2.4.1 文字の向き

書き手と盲ろう者が横並びの状態を書いていくのが読みやすい。

対面で書く際には、
文字の方向をわざわざ
盲ろう者の方向に
直す必要はない。

2.4.2 文字の書き順

正確な筆順が、盲ろう者にとっては読みやすい。

カタカナにおいて読み間違いやすい文字

- ・「ア」と「ヤ」と「カ」
- ・「マ」と「ス」と「ヌ」
- ・「ソ」と「メ」と「ン」
- ・「ク」と「ワ」
- ・「ハ」と「ヘ」
- ・「コ」と「ユ」

2.4.3 サイン

会話・通訳する場合、
うなずきや笑い、
「イエス」「ノー」などについては
お互いにサインを決めておくと、
コミュニケーションがスムーズになる。

例)

はい (Yes) : ○

いいえ (No) : ×

うなずき : うなずくタイミングで軽くポン・ポンと叩く

笑い : ポンポンポンと速く叩く

聞き返し (なに?) : ?

「……」 (分からない) : ?

2.4.4 スピード

盲ろう者の読み取りのスピードに合わせて書く。
読み取りに慣れていない盲ろう者の場合、
文節ごとに「間」を取ると読み取りやすくなる。

例)

今日は□とても□良い□お天気ですね

(□の部分で、間を取る、あるいは、盲ろう者の手の上に、書き手の手をポンと置く)

2.4.5 声を出しながら文字を書く

周りに人がいる場合、
書き手が声を出しながら手書き文字を書く。
そのことにより、
盲ろう者と通訳・介助員との間でどんな話がなされているのか、
あるいはどこまで伝わっているのかなどを、
周囲の人々と共有することができる。
伝えている内容を周囲と共有することは、
コミュニケーションの広がりにつながっていく。
ただし、時と場合、内容による。

2.4.6 周囲の情報

周りの様子をも伝える。

例)

むすこさんが入ってきました 本だなでさがしものをしています←視覚情報
いまチャイムがなっています 12じになったようです←聴覚情報

2.4.7 情報入手手段としての手書き文字

手書き文字は、他のコミュニケーション方法と比べると、比較的伝達速度は遅いといえる。

1分間の伝達可能文字数は、100字程度である。

伝達可能文字数（1分間）

手書き文字：100シラブル

指文字：250シラブル

指点字：350シラブル]

2.4.8 長所と短所

1. 長所

- 導入が容易（すぐに習得できる）
- 汎用性がある（一般的に誰でも使える）

2. 短所

- 伝達速度が遅い（周囲とのタイムラグが発生する）、
- 入手できる情報が相対的に足りない（伝えることのできる情報が限られる）
- ろうベースや先天性の盲ろう者、先天盲の盲ろう者には通じにくい。

ろうベースの盲ろう者で難しい理由

文章力に制約

手書き文字で漢字を読むのが難しい

仮名だけにすると意味が分からない

3 手書き文字による通訳方法

3.1 話者を伝える

話者の名前を必ず最初に書く。

(それを忘れると誰の発言内容なのか分からなくなる。)

話者の名前の伝え方

- 話者の名前の次に / を書く。
- 「 」をつける。
- 名前を○で囲む。
- 名前を書いた後に盲ろう者の手のひらの上に通訳・介助員の手のひらを置く。

いずれの方法を使うのかは、あらかじめ盲ろう者と確認が必要

3.2 直接話法

話者の名前を書いたら、
その後は直接話法で発言内容を書く。

例)

山下/ こんにちは 今日 とても 暑いですね

鈴木/ ええ、汗でびしょりです

3.3 補足説明

発言内容だけでなく、
できる限り補足説明も書きます。

例)

山下/ こんにちは 今日は とても 暑いですね (にっこり笑いながら)

鈴木/ ええ、汗でびっしょりです (ほんとうにびしょびしょです)

3.4 環境調整（スピード・コントロール）

手書き文字での伝達速度は比較的ゆっくりとしたものなので、話者の発言についていけない場合、または、今どの辺りまで伝えられているかを、話者や周囲の人に共有してきたい場合は、通訳・介助員が声を出しながら書いていくようにする。話者の発言スピードをもう少しゆっくりにしてもらう、もしくは、次の話者の話し始めを待ってもらうなど、盲ろう者がその場の話し合いに参加できるよう環境を調整することも大切である。